



Title	金剛コロニー、Dr. Wagner、Chou-san
Author(s)	松下, 彰宏
Citation	大阪公衆衛生. 1997, 70, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83577
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金剛コロニー、Dr.Wagner、Chou-san

大阪府八尾保健所柏原支所長 松下 彰 宏

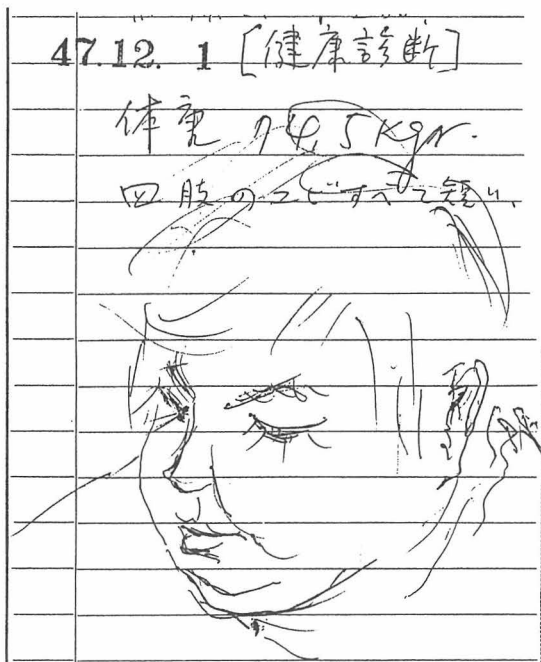
張先生との出会いは自治医科大学の学生時代からになるのですが、実際にいろいろとお話を伺ったりするのは金剛コロニー附属診療所に勤務するようになってからになります。「金剛コロニーというところがありましてね。どうですか、行ってみませんか。」とお話をいただいたのが始まりです。

多くの人がそうであるように、知的障害者の医療という言葉から受ける硬くてしんどいイメージとは異なり、実際に接してみるとこちらが学ばせてもらうことがほとんどでした。また、職員の方々も前向きで、楽しく仕事のできる場所です。

実際には私が勤務していた頃は、張先生は多忙でほとんど顔を見せておられなかったのですが、診察のたびに「寮生さん」と呼ばれる入所者から「張先生はいつ来るのか？」と

しばしば聞かれました。職員からいろいろな話を聞きましたが、富田林地区のタクシー運転手も先生のことを良く知っています。富田林駅から診療所までタクシーに乗れば、「泊りですか？」と尋ねられた後「張先生という先生いてはりましたやろ。」と始まって、診療所につくまでの間自分の子どもの病気の相談をしたことなど、20年以上たっても話題に上ります。今回の悲しい知らせも運転手から確認を受けました。どんなに遅くなくても必ずタクシーで西宮まで帰るいいお客さんでもあったでしょうが、先生のどこでも誰にでも接しておられた態度が伺えました。

よく「張先生ってどんな診療してはるん？」と聞かれました。私自身も診察を見せていただいたことはないのですが、寮生さんの古いカルテを全部ひっくり返す機会があり、先生の診察ぶりを想像することができました。図はある寮生さんのカルテにあった似顔絵で、特徴のある人や自傷などの記録が残っています。また、写真1は先生が職員の子供さんを診ておられるところです。診察の場だけでなく入所者・職員と接しながら、身体も心も全科にまたがるプライマリケアを実践し、また、一流の先生方をコロニーの中に取り入れて下



さいました。

張先生といえば音楽の話題の人です。「かたちに残らないものにお金をかけることが大切なんですよ。」とびっくりするような値段の切符を買って、コンサートを聴きに行っておられたとコロニー職員から聞いたことがあります。音楽と医療、その両方を通じてお知り合いになられたのがDr.Wagner（ワグナーさん）です。オーストリアのウィーンの産婦人科医で奥様とコーラスの日本公演に来られたときに、大阪市内の病院の小児科医であった張先生と出逢われたそうです。以降ずっと親交を続けておられて、お互い「ペーター（Peter）」「Chou-san」の間柄です。私がワグナー家にお世話になったときも、「日本は早朝だけれど、おまえが来たのだから大丈夫だ。」と、電話帳も見ずに国際電話をして、お話をさせていただきました。

写真2はワグナー家での張先生です。日本の部屋を作るぐらいの日本びいきで、飼っておられる2匹のネコは張先生の奥様のふるさと「ムツ」とみんなで作られた思い出の日本料理「スシ」という名前です。ワグナー家での話題の最後はいつも、「Chou-sanはいつになったらウィーンへ来れるか。」「Chou-sanは忙しすぎるのではないか。」になり、答えに困ったものでした。

張先生はすごい人なんだけれど、どこがどうすごいんだろうかと、実はずっと思っていました。結局私の結論は、とにかくすごいんだということになりそうです。接する人みんなを大きな気持ちに、幸せにさせていただいたと思います。

みんながハッピーでいられるよう、何か一つでも受け継いでいければと思います。

